

楽しんで

松山手話サークルつばきの会



★★★★★★★★★★★★★★★★

「心と心の 触れ合いを」

んでいる。
手話表現は、言葉のわからない
小さな子供に母親が身振り手振り
で会話している姿に似ている。し
かし、コミュニケーションをより
深めるためには、ただ単語を並べ
るだけでは、カタコトになってし
まう。ありのままの会話の内容を、
ありのままに伝えなければならな
い。助動詞、助詞なども巧みに使
い分けてこそ、言葉と言葉の「会
話」に近づく。そこが難しい。熟
練にはそれ相応の年月がかかる。
だから、苦労のしがいもあるとい
うわけだ。

◆ ◆ ◆
会員たちは、こつこつと手話技術
の向上を目指しているが、花見、
ピクニック、手話劇などを通して
も、ろうあ者の交流を深める。
つばきの会の活動をより広げるた
めには、「もっともっと、ろうあ
者の人たものつながりを探して
いかなければならない。いろんな
生活場面で手を通わせてこそ、手
話通訳もマスターできる」と
考えたからだ。

◆ ◆ ◆
しかし、こうした努力も「ろう
あ者に対する無関心を打破して、
今のところ片手まじりに留まって、
あまり目の見えなりの現状。
当然、会員のなかからは「その無
関心をほらにやるならぬのか」
というキツい批判の声も。「例え
ば、市役所の窓口で手話通訳を
働くことや、選挙に立候補し通訳を
働かなくても、ろうあ者の社会参
加促進へと広がる。こうした行政
側の配慮は、当然あってしかるべ
きものなのに」とも。

◆ ◆ ◆
ひとりのちいさな手
向もできないけど
それでもみんなの手と手を合わ
せれば、
向かえる
向かえる
向かえる

◆ ◆ ◆
身振り手ぶりに会話ができます。
つばきの会では、人間の持つ自然
のちいささがあふれている。

◆ ◆ ◆
職をなんとかしなくては。

この思いが、つばき会が満足す
ることになったきっかけという。
サークル会員もほとんどが県外
者。「ろうあ者も、一般社会人と
同じようにコミュニケーションを
持たなければならぬ。そのため
にも、自分たちの手で手話通訳を
行い、できるだけ多くの通訳者を
つくっていく必要がある」と、全
員が意欲に燃える。確かな目標を
もった会員たちは、ひたむきに
コツコツと今も努力を続けている
のである。

◆ ◆ ◆
言葉に方言があるように、手話
にも方言があるらしい。また、世
代や個人差によっても、手話表現
は微妙に異なってくるという。
このため、つばき会では、どこへ
行くでも通用する「共通語」を学

◆ ◆ ◆
習得して、足掛け三年。学生、
習得編、〇し、主婦らが集まり、
手話を通して社会福祉に寄与して
いこうと、ボランティア活動を続
けている。メンバーが決まって集
まるのは、毎週日曜日の午後六時
半、松山市山越にある「ろうあ福
祉センター」一階の食堂。手話を
学ぶ「授業」は、たぶら一時間
半。小グループに分かれ、ベテラ
ンのろうあ者たちから指導を受
け、会話をうまく進めるための
「技」を学ぶ。

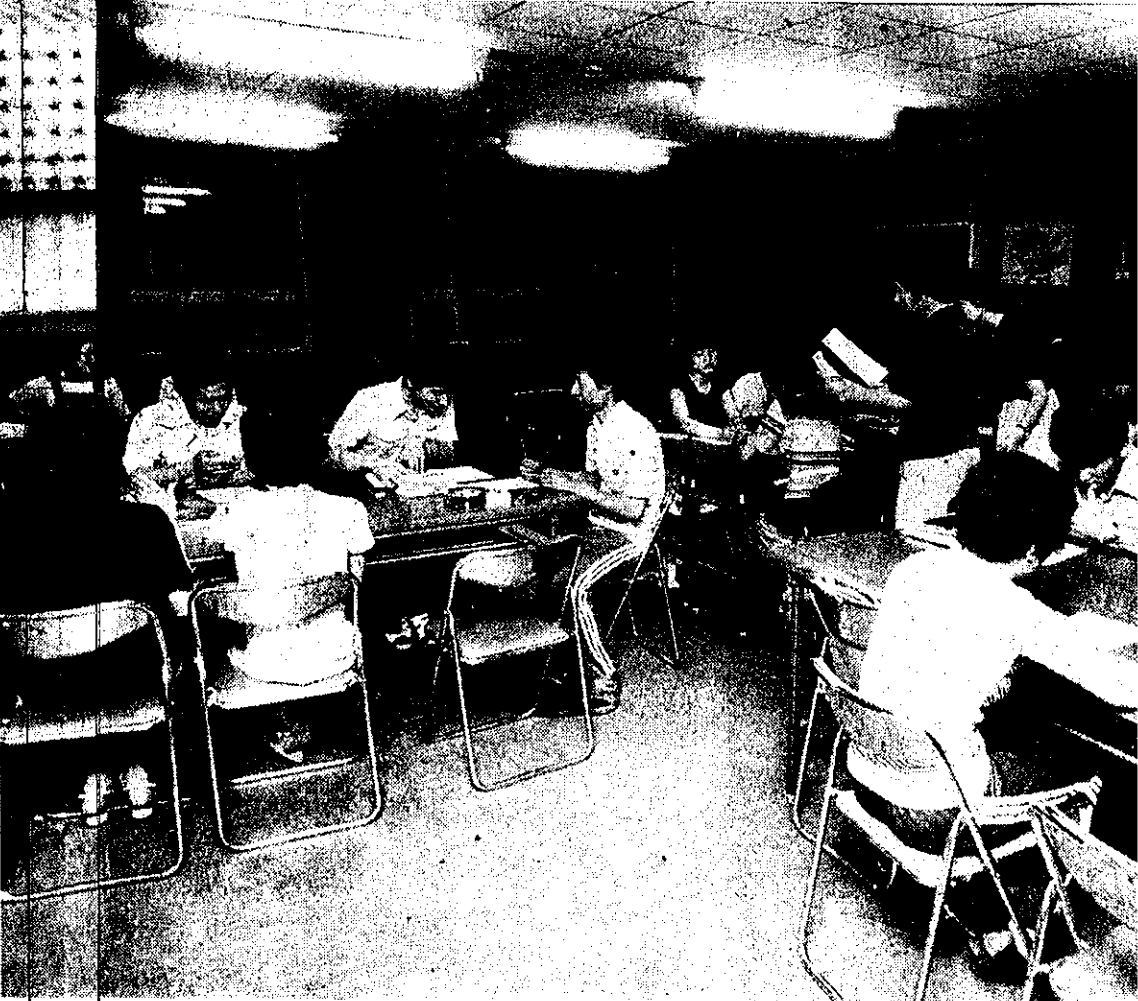
◆ ◆ ◆
会長の太田さんは、福岡市出身
の愛媛大教育学部ろう教育課程
の三年生。
「福岡市には手話通訳者が三百
二十人もいるのに、愛媛県にはわ
ずか十人ばかりいない。県民の
身障者に対するこの低すぎる意

◆ ◆ ◆
『楽しんで手』というよりも
『一生懸命がんばって手』とい
う方が、ピッタリする。「松山手
話サークルつばきの会」(太田福
祉会長、約十人)。手話をマス
ターして、ろうあ者の立場を少し
でも理解しようというのがサーク
ルの目的。「あなたは、何月何日
生まれですか」「私は九月三日生
まれです」「手を広げたり丸めた
り、ほおびに当たったりついたり。
耳が聞こえない、口がきけない、
そんなろうあ者の人たちの心と
心の触れ合いを求めて、楽しい会
話が続く。

(9)

できます





一週一回の勉強の成果は上々。和気あいあいのムードで授業は始まる（松山市山越のろうあ福祉センターで）

行政の立ち遅れ批判も

「あなたは将来も手話を続けていきますか」。コーチの質問に、なれない手つきで「ずっと続けます」とこたえる会員たちの表情は明るい（同）